御堂筋における学生を中心とした活性化に関する取り組み事例*

Local revitalization in down town by universities students - Example from Mido Ave. in Osaka*

猪井博登**・柳原崇男***・鈴木義康****・三星昭宏*****・松村暢彦******

By Hiroto INOI**・Takao YANAGIHARA***・Yoshiyasu SUZUKI****・Akihiro MIHOSHI*****・Nobuhiko MATSUMURA******

１．はじめに

中心市街地の活性化は喫緊の課題である。行政、民間、NPOなど多くの主体で取組が行われている。なかでも学生には柔軟な発想と高い行動力を期待されているが、「どのように参加を行わせるか」「学生による取組によってどのような成果が得られるか」などについて十分には明らかにされていない。そこで、本稿では、大阪市御堂筋の活性化を目指す学生による取組「がんばろうなにわサミット」を取り上げ、この取組で設定した参加の枠組みと得られた成果について述べ、「どのように活動を行わせるか」「どのような成果が得られるか」について考察し、学生を中心市街地活性化に取り込んでいくための留意点などについて述べる。

さらに、「がんばろうなにわサミット」に参加した学生の意向についても考察する。そこで、取り組み中に中心市街地活性化の取組への参加意向の変化を把握した。

２．がんばろうなにわサミットの概要

（1）位置づけ

がんばろうなにわサミットは、国土交通省近畿地方整備局が「御堂筋の再生に向けた取り組み」の一環として、学生の柔軟な発想と行動力を御堂筋再生の原動力として活かそうと、御堂筋の活性化に資する様々なテーマについて、学生自ら企画、実行（試行）、検証する場として設立された学生による団体である。

将来の御堂筋のマネジメントは、ＰＰＰ（Public Private Partnership）の概念を取り入れることにより、道路管理者主体の「道路管理」から、市民・民間・行政の協働による「みちからまちへのマネジメント」への展開が求められている。そのために、市民・学生、ＮＰＯ、地元組織、地権者、企業、経済団体、行政機関等の多様な主体が参画する仕組みや具体的な活動・プロジェクトを創出・展開していくためのプラットホームとして、現在、「御堂筋マネジメントセンター準備室」が試行的に運営されている。

がんばろうなにわサミットは、御堂筋を舞台とするフィールドワークを通じて学生の企画立案能力、実行力、コミュニケーション能力等の向上を図り、次代を担う人材を育成するとともに、そこで生み出された提案の中で社会性や事業性を兼ね備えたものは実際に実行に移すことによって、御堂筋再生プロジェクトの推進、御堂筋の活性化につなげていくことが期待されるものである。がんばろうなにわサミットの取り組みは、一過性の、短期的なものではなく、学生、地域住民、企業等が継続的に御堂筋の再生に参画するための長期的取り組みの一環として運営されるものである。

（2）活動体制

参加資格は、原則として、御堂筋マネージメントセンターで行われる会合に出席することができる大学生・大学院生とした。2005年度は初年度であったため、各大学の教授に「御堂筋の活性化に興味を持つ大学生・大学院生」の推薦を依頼し、表－１に示した学生の参加を得た。しかし、2006年度以降は、2005年度に参加した学生の推薦などによって増員を行う予定である。

表－１　参加学生の出身大学

大学名	専門	人数
大阪大学	土木系	4
	都市計画系	2
大手前大学	建築系	4
大阪市立大学	土木系	3
宝塚造形大学	建築系	3
近畿大学	土木系	1
計		17

表－１に示したように、参加学生の専門は土木系と

*キーワーズ：中心市街地活性化、市民参加、大学生

** 正員、工博、大阪大学大学院工学研究科
（大阪府吹田市山田丘２－１、
TEL06-6879-7609、FAX06-6879-7612）

*** 正員、工修、近畿大学理工学部

**** 正員、工修、株式会社 日建設計

***** 正員、工博、近畿大学理工学部

******正員、工博、大阪大学大学院工学研究科

建設系がほぼ半ばであった。活動サイクルは6月から翌年5月の1年間をタームとしており、本年の5月に最初の1周年目を迎える。

なお、学生の学年は学部3年生 3名、同4年生 4名、博士前期課程１年生 5名、同2年生 2名、研究生１名である。

（3） 活動の環境

がんばろうなにわサミットの会合は、御堂筋マネージメントセンター準備室で行った。御堂筋マネージメントセンター準備室は、大阪市中央区淀屋橋にあり、御堂筋から130mほど離れている。最大30人ほどで打ち合わせを行うことができる広さを有しており、参加学生の代表者４名にキーが渡され、休日や放課後などに使用することもできる。また、御堂筋マネージメントセンターには、3台のPCとインターネットが整備されており、この使用もできる。

（4） 運営の原則

学生の発想を阻害しないように運営は学生に任せた。アドバイザーとして、筆者らのうち２名が参加したが、アドバイスを求められた場合のみに限定した。また、取組全体の名称も学生間で議論を行い、「がんばろう なにわサミット」と決定した。

３． 活動経過

（1） 学生の参加について

学生間の交流を図り、御堂筋に対する認識をそろえるため、取組の初期には、全員で会合（全体会）を行った。初回の全体会は、御堂筋の良いと感じる点、悪いと感じる点について議論を行った。第２回の会合は、初回の全体会で出された「悪いと感じる点」に対して解決案を考察するとともに、御堂筋や他の地域で行われている地域活性化の取組から、先進事例を調べ、これらを発表することにより、議論を行った。この議論をもとに、各学生の興味のある活性化の方法について把握し、下記の３グループに分けることとした。

- イベント企画による活性化を目指すグループ（以降「イベントグループ」）
- 自然との共生を行える御堂筋の改造案を提案し活性化を目指すグループ（以降「自然グループ」）
- 情報の整備によって活性化を目指すグループ（以降「情報グループ」）

学生全員１７人での細部についての議論は難しく、他の学生が意見を出すまで待つという恐れがあったため、小グループに分け、議論の効率化を目指した。

各グループでの検討内容は、3ヶ月程度を目処として開いた全体会で、発表および質疑応答を行い、グループ間の競争意識の向上をはかった。

表－２　会合の開催

グループ名	開催数	平均出席者数
イベント	23	4.3
自然	9	5.4
情報	18	5.7
全体会	5	13.8

※2005年3月14日から2006年4月22日まで

会合の日程は、学生同士で調整を行い、日程を決定した。共通する時間を取ろうとすると、結果として、平日18:00以降の放課後、休日が多くなった。

（2） 各グループの討議内容と成果

a) イベントグループ

御堂筋で行われているイベント（御堂筋パレード、御堂筋フェスタ、大阪国際女子マラソン）などを調査し議論を行った結果、新たにイベントを行うのではなく、既存のイベントの不足分を明らかにし、不足点をおぎなう提案を行うこととなった。特に、観客が多く集まるものの、マラソン競技に着目し、イベントについて検討を行っている。そこで、2006 年 1 月 29 日に行われた大阪国際女子マラソンにて、観客の流動調査およびマラソン観戦前後の行動ヒアリング調査を行った。その結果、マラソン観戦後、多くの観戦者が御堂筋周辺に滞留せず、他の地区へ移動してしまっていたことが確認できた。また、周辺の飲食店や御堂筋の見所についての情報を得たいとのニーズを得ることができた。以上から、マラソン観戦者に周辺の飲食店や御堂筋やその周辺にある彫刻や建物の情報を提供することなどを提案内容として検討を行っている。なお、この検討内容を、財団法人 IAAF 世界陸上 2007 大阪大会組織委員会に提案予定である。

b) 自然グループ

御堂筋周辺で働く者では、御堂筋周辺で日中の大部分の時間を過ごすにもかかわらず、御堂筋周辺は緑が少なく、憩える環境の整備ができているとはいえない。そこで、自然と触れ合うことによる憩いの環境の整備を目指し、御堂筋の整備提案を検討した。まず、御堂筋の周辺で自然を取り入れ活性化を目指している取組を調査し（オーガニックビル[1)]、水辺ランチ[2)]）、御堂筋周辺の自然環境や公開空き地について調査を行った。

上記の検討をもとに新橋交差点に着目し、緑のネットワークの断絶の解消をめざし、緑化高架歩道の提案にいたった。なお、提案は、第１回土木計画学公共政策デザインコンペに「水と緑の立体歩道　～様々な憩いを感

じる空間を…～」として出展している。

c）情報グループ

御堂筋および周辺には、歴史的建築物や彫刻など見所が存在するが、情報が十分に行き渡っているとは言えず、これらの資源が活用されているとは言いがたい。そこで、御堂筋周辺の飲食店などの情報をカプセル自動販売機にいれ、提供することにより、情報提供が可能かを検討している。また、参加学生に聴覚障害を負った学生がおり、駅などのバリアフリー化は進みつつあるものの道路に出て、飲食などを楽しむことができないとの意見を受け、御堂筋周辺の物販施設、飲食店の車椅子でのアクセスの可否、店員の対応の可否について情報を収集し、ＨＰなどでの情報提供を目指している。これらをもとに第１回土木計画学公共政策デザインコンペに「御堂筋ちょっと歩いてみませんか？」として出展している。

（3）　考察

a）　参加の方法について

３グループに分けて議論を行ったところ、学生１人あたりの発言も増加した一定の成果を見た。しかし、グループ分けは固定ではなく、「他のグループの会合にも出席することが可能であること」を伝達したものの、所属するグループ以外の会合に出席することは少なく、グループ間の交流が少なくなく、「他のグループで検討、議論されている内容を知らない」という不満を学生から出ており、改善の必要性がある。

また、３グループを競わせることにより、意識の向上が見られたものの、議論の結果が出なかったグループにおいては、議論が止まってしまい、先に述べたアドバイザーのかかわり方を超えて、取り組む内容の助言を行うこととなった。

上記の問題点を考慮すると、がんばろうなにわサミットで行った「数回の全体会の後、グループにわけ細部を議論し、全体会で議論内容の意識統一を図る」という参加の方法に対し、「全体会を中心として活性化を行うべきことなどを議論しながら、平行し、小委員会形式で細部について議論を行う」という参加の方法を代替案とすることを検討する価値もあろう。

b）　成果について

今回設定した３グループともに、御堂筋の活性化の提案として一定の成果を作成することができた。

しかし、あるグループでは、議論を重ねるにつれて、会合の初期に見られた学生らしい自由な発想などが失われ、実現性や現実性に主に配慮した提案になり、悔やまれる点であった。

また、成果作成については、アンケート調査やデザイン画の作成などについては、才能を発揮する学生が多く、提案書の作成、ポスターやプレゼンテーションの作成などは順調に進んだものの、カプセル自動販売機の設置など実際の行動という面では、手をこまねいている点が見受けられ、アドバイザーの関与が必要であった。

１人の学生が柔軟な発想と高い行動力の両者を有していることは少なく、学生間で補完しあうことが求められる。４人のグループの場合、補完を十分に行えなかったことが、上記のような問題が発生した一因と考えられる。当初は、学生が１つのグループへの帰属するのではなく、複数のグループにわたって活動することを想定していたため、議論を行う効率化および各個人の参加意欲を向上するため、グループの人数を２グループで４人とした。グループの人数についても再考が必要である。

４．　取組が学生に与えた影響

（1）調査の概要

がんばろうなにわサミットの取組が学生の意識に与えた影響をはかるため、2005/3/18、4/14、5/14、6/27、2006/3/22の５回の全体会に参加した学生にアンケート調査を行った。2005/3/18、4/14、5/14、6/27の回答と、2006/3/22の回答を比較し、取組が学生の意識に与えた影響を把握する。そのため、５回のアンケートにすべて回答を行った８名の学生の意見をもとに考察を行う。なお、アンケート調査項目や自由記入欄への記入をもとに運営方法の検討を行ったため、2005年度当初は複数回の調査を行った。

質問項目は心理測定尺度集[3]より集団・リーダーシップを問う項目をもとに作成し、図－１の凡例に示した。

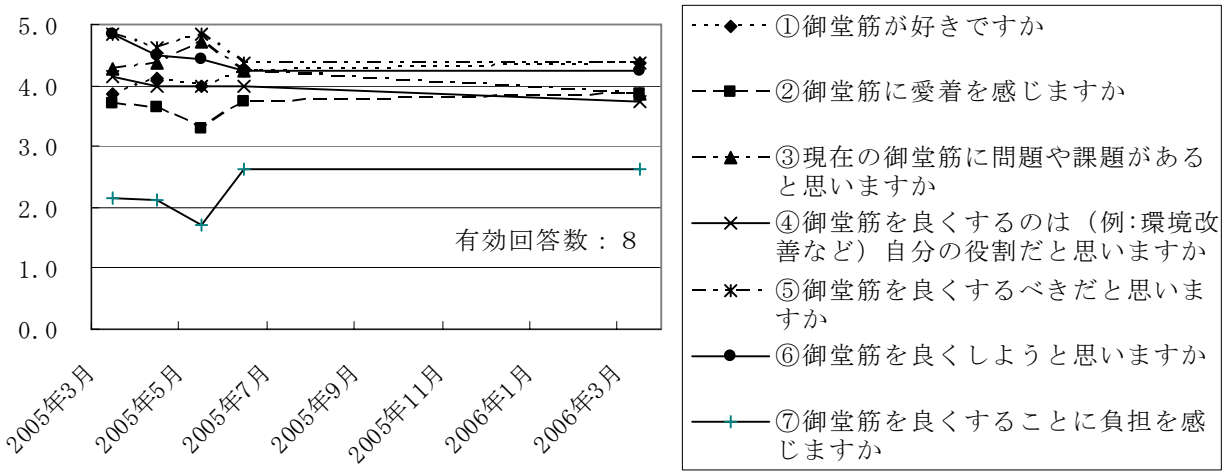
具体的には、御堂筋に対する親近感（①、②）、御堂筋の活性化の必要性に対する認知（③、⑤）、自分の参加意識（④、⑥）、がんばろうなにわサミットの取組から感じる負担感（⑦）を質問した。質問の尺度は「とても思う」「やや思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「全く思わない」の5段階で質問をした。

（2）意向の変化

５段階の質問の尺度に対し、「５：とても思う」「４：やや思う」「３：どちらでもない」「２：あまり思わない」「１：全く思わない」を当てはめ、平均を取り、図－1に示した。

御堂筋に対する親近感（①、②）については、①、②の質問ともに増加しており、御堂筋に対する親近感が向上したことが読み取ることができる。

一方、御堂筋の活性化の必要性に対する認知（③、



図－１　参加学生の御堂筋に対する意識の変化

⑤）については、③、⑤ともに５月をピークとして、その後、減少している。自分の参加意識（④、⑥）についても、単調減少している。ただし、これらの指標が、減少傾向を示しているとはいえ、⑤、⑥は４以上と高い値を示している。これらは、御堂筋の現状を把握し、御堂筋で行われている他の取組を認知した結果、これに対応する取組の難しさを認知した結果であると考えられる。

この点は、がんばろうなにわサミットの取組から感じる負担感（⑦）については、5月で減少したもののその後は増加している点とも合致し、現状で行われている取組を向上することを考える難しさのため負担感が発生していると考えられる。また、作成した提案に、既存の活性化の取組で不足している「情報の伝達」などにより補うという点が見られることとも合致する。

また、⑤、⑥を比較すると、⑥のほうが高い値を示しており、御堂筋の改善にはかかわらなければならないという意識が現れていると解釈することができる。

５．まとめ

がんばろうなにわサミットでは、会合の場所をはじめ、比較的整った環境で取組を行うことができた。そのため、不足していた資源は特にない。ただし、討議を行う形態については、各グループに分かれ提案に向けた討議を行ったが、グループ間での情報交換がやや滞ったため、本文中に提案したように、「全体会を中心として活性化を行うべきことなどを議論しながら、平行し、小委員会形式で細部について議論を行う」という参加形式を検討する価値があろう。

がんばろうなにわサミットで得られた成果についての外部評価は、第１回土木計画学公共政策デザインコンペにゆだねるが、コンペに出展を行ったという点で、ある一定のアウトプットを行ったと評価することができるだろう。

２年目を迎えるにあたり、新たな学生の確保今後の課題となろう。

謝辞

がんばろうなにわサミットの創設、運営にご尽力いただいた大阪国道事務所地域調整課吉村課長、同高松係長に心から御礼申し上げます。また、がんばろうなにわサミットで活動する学生のこれまでの真摯な態度に敬意を表します。

参考文献

１）UDコンサルタンツ：http://www.ud-c.co.jp/works/works_udcon_organic.htm、（最終訪問日：2006.5.7.）
２）水都OSAKA水辺のまち再生プロジェクト：http://www.suito-osaka.net/html/lunch.html、（最終訪問日：2006.5.7.）
３）吉田 富二雄、堀 洋道：心理測定尺度集〈2〉人間と社会のつながりをとらえる“対人関係・価値観”、サイエンス社、2001.